

● シリーズ 私の見た日本 Vol.179

## 日本とニュージーランドの知られざる共通の建築文化

Benjamin Everitt (エバレット・ベンジャミン)

もともと日本生まれだが、ニュージーランド出身。2016年ニュージーランド・ヴィクトリア大学ウェリントン建築学科卒業、2019年同大学院建築研究科修了。現在、交建設計 (Koken Architects) 勤務。



本題に入る前に、私の日本とニュージーランドという2つの国にまたがる文化的アイデンティティについて少し説明したい。私は家庭内では日本人として育ち、一方でほぼ完全に西欧流の教育を受けてきた。日本で生まれ、シンガポール、フィジー、ニュージーランドで育ち、現在は日本で暮らしている。このような人生経験が私の文化的コンテクストを形成し、日本建築に対する捉え方に大きな影響を及ぼしている。

これまで受けた建築教育において、日本の建築の空間のつくり方や設計手法は、日本独特の習慣や文化によってつくられるものであると考えていた。また、磯崎新が著書「Japanness in Architecture」で言及しているように、日本の歴史や地理、文化現象からなる条件によって独特な構築環境がつけられていると思いついてきた。

しかし、日本人建築家・坂茂によるクライストチャーチの紙の大聖堂がニュージーランドの人々に受け入れられているのを目の当たりにすると、「日本の独特さ」は日本のみに適したものではなく、アジア太平洋の国々においても一般的に受け入れられるものであることがわかる。

2011年に起きたカンタベリー地震では町のシンボルの存在であったクライストチャーチ大聖堂を含む都市全体が破壊され、一から

町を建て直すなくてはならなかった。地震発生後、坂茂は現地の教会のクレイグ・ディクソン牧師に「阪神・淡路大震災の時、神戸で建てた紙の教会と似たような大聖堂をつくってほしい」と頼まれたことから、以前から行っていた東日本大震災での支援活動に加え、ニュージーランドでの活動にも携わるようになった。

主構造は坂茂の代名詞とも言える紙管を三角形に組んだものが用いられ、正面の三角形のファサードにはステンドグラスが施された。三角形の形は元の大聖堂を構成していた伝統的プロポーションの原則に則ってつくられており、現地の文化を踏襲している。

もともとは崩壊した旧大聖堂の仮設施設としてつくられた紙の大聖堂だが、地震発生後真っ先に建てられた大規模構造物として都市の復興のシンボルとなった。

坂茂が東北や神戸で建ててきたものと同じく、使用する人によって文化的価値が生まれ、仮設建築であっても永続的な価値がえられることがわかる。

紙を建築構造物として使うことを思いつくのはおそらく日本の建築家くらいであるが、私を含めニュージーランド人の視点から見ても、外来の建築、といった違和感はない。すでに10年もの間崩壊した状態のまま現存する旧大聖堂を見ると、そもそもヨーロッパの

伝統的組積造の建物は環太平洋の地震多発地帯の環境に合っているのか、と逆に疑問に思ってしまうほどだ。坂茂が設計した紙の大聖堂はスター建築家の作品としてランドマークになったのではなく、ニュージーランドの文脈に合致したからこそランドマークとなりえたのである。

これから先は、日本と環太平洋の建築的比較文化論について論じてみたい。

## 文化の根本的な共通点

坂茂の紙の建築に対する評論は、偶然の一致でも、新奇なものに対する驚きでもなく、共通の人類学的起源からくる共通の文化的価値観の表れであると言えるだろう。言い換えれば、日本やニュージーランドをはじめとする環太平洋地域のヴァナキユラー建築のなかに共通する要素があるのではないかと、とも言える。

文化人類学者のアルビらの研究によると、日本とその他の環太平洋のヴァナキユラー建築を分析するとさまざまな類似点が存在するという。この研究では、日本を代表する建築物である伊勢神宮と、東南アジアや太平洋のさまざまな民族からなるオーストロネシア語族の伝統建築を比べると文化的に同じ形跡が数多くあるとしている。高く盛り上がった葺葺屋根、木構造、上げ床、透過性があり内

外をシームレスにつなげる外壁などが共通点としてあげられる。

似た建築的伝統をもつということは、日本とニュージーランド、その他の環太平洋地域には似たような文化的価値観があるに違いない。例えば、伝統的に木造の建築様式がある点において、オーストロネシア語族の民族には木材に対する同じ文化的価値を見出すことができる。日本で言う「大黒柱」は文化人類学のなかでは「儀式を引き継ぐ柱」(Ritual Attractor) と呼ばれ、他の民族建築でも柱に同じ文化的価値が与えられている(メモット・デイビットソン)。ニュージーランドの先住民マオリ族においてこの柱は「タフフ」(tahuhu) と呼ばれ、部族を支える先祖を意味していると言われている。さまざまな民族が柱に文化的な意味を与える理由は日本と同じであり、大黒柱の周りが建物内で最も上位な構造体であるとされ、そこには重要な財産が保管されている。

この木材に対しての感傷的な思いは、実際の木造建築をつくる時に共通点を見出すことができる。日本やニュージーランドのマオリ族がつくる伝統的木造建築において、柱はも

ともと木が立っていた方角と同じ方角に建てるという習慣がある。このような建て方には伐採した樹木をなるべく元の自然な状態に保ち、尊重しようとする思いが込められている。

日本の建築は伝統的建築を近代建築に取り入れる際に圧倒的な違いを見せる。紙の大聖堂を例にあげると、坂茂が使用する紙管は木材と置き換えられただけではなく、木造に対する文化的価値と思いやりを近代的な素材に込めたものだ。紙に残っている自然の素材感と、人々を囲むように配置された柱は日本の伝統的な考え方の表れである。ニュージーランドで日本独特の素材でつくられた建築物が町のランドマークとして評価されるのは、環太平洋のヴァナキユラー建築のさまざまな特徴が共通しているからとも言えるだろう。

それぞれの民族の建築は文化的に独特ではあるが、その違いのなかで共通点を見つけることによって新しい設計と意匠を探求することが可能となる。私が見た日本の建築は現地の特徴や伝統を近代的に表現する点において優れており、このデザイン手法は環太平洋のさまざまな民族の文化や伝統を生かすためにも使えるのではないかと感じている。

参考文献  
清家 清「木材の文化」Japan: Climate, Space and Concepts 25巻(1981): 17-25. 志修 Arbi, E. et al. (2013) "Austronesian Architectural Heritage and the Grand Shrines at Ise, Japan." Journal of Asian and African Studies 50 (1): 7-24. Memmott, P. and J. Davidson (2008) "Exploring a Cross-Cultural Theory of Architecture." Traditional Dwellings and Settlements Review: Journal of the International Association for the Study of Traditional Environments 19 (2): 51



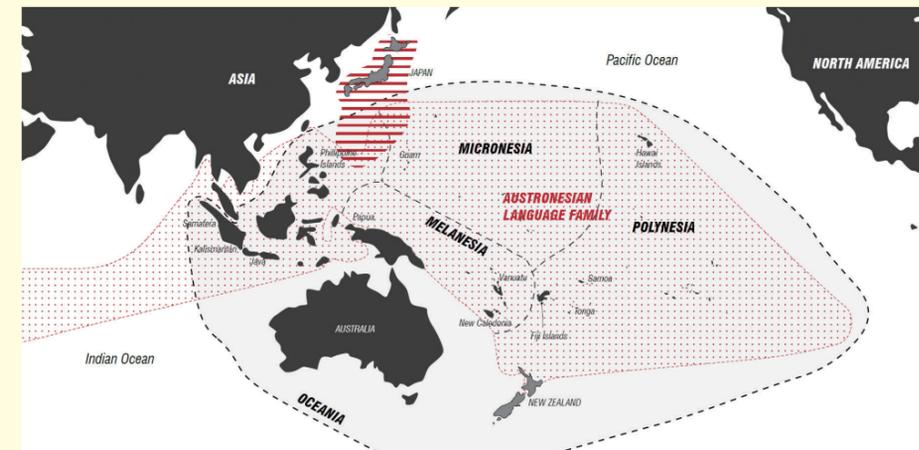
紙の大聖堂 (坂茂) Tony Hisgett (CC BY 2.5)



神戸・紙の教会 (坂茂) Bujdosó Attila (CC BY 2.5)



崩壊した旧クライストチャーチ大聖堂 Schwede66 (CC BY 3.0)



文化人類学者・アルビの研究によると、オーストロネシア語族とは地図上の赤い枠の中に位置するさまざまな国を含む。日本の建築物はこの語族の建物と非常に似ていると言われている